

平成二十九年 度

麗澤瑞浪に学んで



発刊にあたって

校長 蟹井 克也

この「麗澤瑞浪に学んで」は一年間の生徒の様々な思いや感動などを綴ったものです。毎年六月に行っている「伝統の日・感謝の集い」での発表原稿、生徒寮で開かれる体験発表会での発表原稿、今年度から行っているオーストラリア修学旅行の感想文など、本校のさまざまな活動のなかで綴られた多くの原稿の中の一部を纏めたものです。

私どもの学校は、創立者廣池千九郎が提唱した道徳科学(モラロジー)に基づく知徳一体の教育を基本理念とし、心に仁愛の精神を培い、国家、社会の発展と人々の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成することを教育目標としています。日常の学校生活のなかで、私たちはこの確固たる教育目標に沿って教育活動を行なっているわけですが、その効果の一端を生徒の作品の中から感じとっていただけたら幸いです。

伝統の日感謝の集い生徒発表

祖先とのつながり

3年 波尻 祥希



りませんでした。その祖先のことを私たちは普段から意識しているでしょうか。

私たちの最も身近な祖先と言えば、親や祖母ではないでしょうか。僕の祖父の一人は既に他界しており、いるのは祖母だけです。その祖母に一つの質問をしてみました。

「うちの祖先は、どこで何をしていたの?」と。

祖母が言うには、僕の家は代々続く機織り屋だったそうです。その名残か、今も家の倉庫には沢山の機織り機や、生糸を紡いで加工する機械があります。祖先の中で高祖父、つまりひいひいおじいさんにあたる人に波尻豊蔵という人がいます。

高祖父は丹後、つまり京都府北部でちりめん問屋をしていました。ちりめんというのは絹の織物のことです。ちりめんの特徴は縦糸と横糸に右巻きや左巻きを加えて凹凸のある肌触りの良い織物になり、高級な風呂敷や呉服になります。高祖父はちりめんをつくるため、今で言う下請け業者のグループを作り、各家庭で機織りができるように農家に機械の導入を進めていました。農家に機織り機を買ってもらい、生糸を提供して絹織物を作ってもらおうということをしてい

私たちがここにいるということはどれほど恵まれてることなのでしょう。私たち一人ひとりに父と母がいて、そして父と母にもまた父と母がいます。十世代遡るだけでも約千人もの祖先がいます。もしその中の一人が欠けたとしても僕たちがこの世に誕生することは決してあ

ました。いくら糸を提供すると言っても、機織り機を買うお金のことを心配されたりして思うように引き受け手が集まらず、大変な苦勞をしたようです。

丹後地方は「弁当忘れても傘忘れるな」ということわざがあるように、湿度が高く機織りには適した土地だったようです。先祖のいた丹後地方はちりめんとともに発展していきました。丹後ちりめんの中心地の一つ、京都府与謝野町には「ちりめん街道」と呼ばれた古い町並が残されています。僕の祖先がそのような歴史に一役買ったと思うと、とても誇らしい気持ちになります。たった数代遡っただけでもそこには誇ることができる祖先がいることを知り、自分の家の歴史を知ることの大切さを学びました。

私たちは普段あまり意識していませんが、ここに立っていること自体たくさんのお恩を受けています。また、ここに私たちが集っていることも先人の恩恵のおかげです。昨年の夏、僕は「廣池千九郎物語」を読みました。廣池先生は「道德こそが幸せの鍵」だと考えて、麗澤の前身である道徳科学専攻塾を作られました。麗澤は生き方を学ぶ学校で、日常生活の中で道徳を実行する

場所として、私たちは寮生活をしています。僕の父も麗澤瑞浪の卒業生です。そして僕をこの学校に入れてくれました。こういうことは元はすべて廣池先生が学校を作ってくくださったおかげです。

みなさんは「恩送り」という言葉を知っていますか？これは受けた恩を他の人に渡していくという意味の言葉です。私たちは知らず知らずのうちにたくさんのお恩を受けています。先人たちは受けてきた恩を次世代にバトンのようにつないでくれました。私たちは恩に気づき、恩に感謝し、恩を送っていくことが大切だと思います。

伝統の日感謝の集い生徒発表

伝統を受け継ぐ

6年 河村 慶一

私には深く尊敬している人がいます。それは十年前に他界した曾祖父、河村平右衛門です。曾祖父は、明治時代の終わりに造り酒屋の六代目として生まれ、幼少期は不自由なく生活していました。

そんな曾祖父に人生の不運が訪れたのはわずか8歳の時でした。妹、祖母、兄、父、弟、姉が次々と病気で他界してしまい、母親と二人だけの寂しい家庭になってしまったのです。その後も不幸は続きました。従業員が事故で亡くなったり、不祥事を起こしたりと、次々と深刻な問題が降りかかりました。

人生の淵に立たされた曾祖父は、ある時転機を迎えます。曾祖父はお寺の総代をしていましたが、その会合の時にある方の話から質の高い道徳「モラロジー」を知ったのです。最初は半信半疑だったそうですが、その後百日間の講座を受講し「利己的な心を直し、慈悲の心を育てることが幸せへの近道である」ということを学んだそうです。結婚後も、長男、つまり私の祖父は小児マヒという病気にかかり、幼少から足が不自由になってしまいました。河村家の試練はまだ続きましたが、その時曾祖父は「伝統と呼ばれる大恩人の系列があり、その人々に対して感謝、報恩していくことが大切である」ということを学び、報恩を絶えず行うことによって、試練を一つ一つ乗り越えていったのです。

私は今回の発表の場をいただき、改めて曾祖

父が書き残した原稿、そして曾祖父について書かれた本を読み、また祖父や父からは様々な苦勞話を聞きました。それによると曾祖父はその後自分の体験を通して、学んだことを人に伝える役割を果たしてきたということです。曾祖父は「自らを犠牲にして、神や伝統に報恩することが私たちに与えられた使命である」と言っていました。伝統から恩恵を受けているという自覚を持ち、受けた御恩に対して少しでも報恩させていただき、人々の幸せになるお手伝いをさせていたかどうかという気持ちを持つことが大切だということです。

私が曾祖父の生き方から学んだことはたくさんあります。

一つ目は、自分に与えられた力は自分のために使うのではなく、人のために使うということです。曾祖父はそれまで営んでいた酒屋に代わってスーパーマーケットを開業しました。スーパーマーケットの経営には良い時もそうでない時もあつたようですが、曾祖父は常に地域への貢献を心がけていました。「感謝・報恩」を掲げる経営理念を通して、従業員一人一人が人間性を高めることこそが、何よりの地域貢献である



ことは、曾祖父から祖父、そして現在の社長である父へと受け継がれています。

私は現在高校3年生になり、日々勉強に励んでいます。麗澤の教育理念は「知徳一体」と言いますが、知識と同時に「徳」つまり品性を高めなければ社会から必要とされる人間にはなれないと思います。私もまだまだ至らない点が多く、両

親や先生方には随分心配をかけています。しかし将来、九代目として曾祖父から引き継がれてきた「感謝報恩」をしつかり受け継いでいける人間に成長したいと思います。

二つ目は、伝統に対する感謝の気持ちを忘れないことです。私の家では毎年十二月に伊勢の神宮を参拝します。曾祖父が生きていたころから、親戚一同が揃って参拝しています。忙しい大人たちが都合を合わせることは大変だと思いますが、毎年欠かさず続けています。物心ついた時、曾祖父はすでに体が弱く、車いすでの参拝で、私も幼いころ曾祖父の車いすを押した記憶があります。体を引きずってでも参拝している曾祖父の姿を見て、伝統に報恩する強い気持ちを感じました。私は幼いながらも人は大きな力によって生かされている、それを片時も忘れてはならないのだということを学びました。

大切なことをたくさん教えてくれた曾祖父は十年前に亡くなりました。曾祖父がモラロジの勉強を始めた時に二人だけだった家族は今では六十人を越えました。この世に曾祖父はいませんが、必ず見守ってくれていると思います。伝統は一本の糸のようなものだとされていていま

す。どこかで途切れてしまつては後世に伝えることはできません。これまでの伝統のおかげで今の自分があるということを自覚し、感謝の気持ちでその恩に報い、それを後世に伝えて行くことが私たちの最大使命であると思います。

寮内体験発表会生徒発表

決断

A5寮 4年 稲葉 航紀

僕が高校へ入学してから約7ヵ月。高校寮での生活は、中学寮で3年間過ごしてきたおかげで、日課の違いに少し苦労し



ただだけで生活面では充実した。しかし、学習面では少し違った。中学寮とは違い個室での生活は入寮したての僕に高校生としての自覚と責任を植え付けた。しかし、僕は一人と言う状況に甘えて勉強をしなかったために一学期中間、期末と苦手科目を中心に成績が落ち込んでしまった。

この選抜寮は勉強する意識が高い人が集まる寮であり、また義務教育を離れた今では勉強する

こと自体にも大きな責任がある。それを知らながら嫌な事から逃げ回っていた自分を恥ずかしく思い、二学期はまず勉強から見直した。

ここで僕が二学期に出来るようになったことを2つ述べたい。

第一に、「嫌な事から逃げないこと」が挙げられる。沢山の宿題が出たり、テストが近かったり、低い点数のテストが返ってきたり、と出来ればやりたくないが避けては通れない出来事に出会った時にどう立ち向かうかが重要になる。嫌々やったのでは全て無駄である。悪い事もポジティブに受け止め、それを反省し、自分のためにと思い、ちゃんと向き合い受け入れる事によって自分のものになることが出来るようになった。

第二は、「決断」である。僕は、生まれてからこの寮に入るまで、大きな事は大概、親に任せっぱなしで、この中学に入ったのも親の勧めだった。このように親の敷いたレールの上を歩いて来た僕にとって、この寮は特に大きな影響を与えた。特に、2つ上の先輩方は、自分の将来をより良くするために自分の行きたい大学を目指して受験勉強という過酷な戦いに挑んでいる。1つ上の先輩方も、その受験勉強を有利に進める

ための文系、理系の選択、またその中でも自分のできる科目の選択を決めている。これも全て自分の行きたい志望校へ行くためであり、その志望校もいかに自分に合った大学にするかという一種の決断である。そんな、周りが決断だらけの環境にいと、自分も危機感を持つようになってくる。こんなに周りが切迫しているのにどうして自分は気楽にいられるのかと、一学期の頃の自分を恥ずかしく思う。そして現在、自分自身も大きな決断をすることにした。それは、名高い、ある難関国立大学へ挑戦することにしたのだ。勿論、今の成績や模試の結果を見れば無謀とも思える挑戦である。しかし、このまま無為に高校生活を送るよりは、より学習環境の良い寮、憧れの先輩方、そして、切磋琢磨し合える仲間と一緒に、より高い所を目指した方が、より生活も充実し、人生の宝物に出来るだろう。自分の人生は自分で切り開くものであり、他人任せには出来ない。そのために僕はこれからも必要ときにはしっかりと決断しようと思う。

そして、最後にこれからの自分の目標について話そうと思う。まず第一にどんな時でも諦めない事。いくら自分の嫌なことに向き合い、その

上で重要な決断をしたとしても、そこで諦めてしまったら元も子もない。受験勉強は長く険しく、そして、孤独だ。そこで思うような結果が出ず諦めてしまえば自分の道を自分で潰すようなものであり、きつと後悔する。そのために、まず、何事も諦めないようにしたい。

第二に、挑戦する事。成功する確率が低かったり、心の中で無理だと思ってしまうような事でも、まずは挑戦する。そうすればその反省を次に活かすこともできるし、違った道も拓けるかもしれない。

そして最後に、感謝の気持ちを持つこと。勿論寮生活をしている上で、この感謝の気持ちを持つことは大切であるが、日々生活をしていると忘れてしまう。もし、嬉しい楽しい事があったなら、それはここに入れてくれた親のおかげであるから感謝したい。逆に、嫌だとか、苦しい厳しい、きついといった状況でもそれは自分を向上させる機会だと思つて感謝したい。

以上の三つのことを目標にして、2年と半分の寮生活を充実したものにし、最後に、卒業するときに、麗澤に入って良かったと思えるようにしたい。

家族のつながり

B1寮 5年 梅田 美里

私の実家に親戚が集まったある日のことです。

大人たちが一つの紙を囲み話し合っていました。

何の紙だろうと思った私は、少しのぞいてみることに。すると、そこには膨大な家系図がありました。どうやら祖先について話し合っていたようです。家系図を見せてもらうとそこには知らない名前がたくさんありました。その時思つたのは、「一体、私にはどれくらいの祖先がいるのだろう。」ということですが、皆さんはどうでしょう。自分の祖先をどこまで言うことができますか。私自身祖母あたりしか関わったことがないので、そこで限界でした。しかし、この作文を機に祖先について調べてみようと思いました。

まず、人間一人あたりにどれくらいの祖先がいると思いますか。私たち人間は2人の親がいます。その親たちにも2人の親がいます。このよ



うにして計算していくと、4代前の高祖母は16人。8代前まで遡ると256人となります。計算していくときりがありません。しかし、私たちに多くの祖先がいたことは間違いないでしょう。そして、この祖先が一人でも違ったら現在の私たちはここにいないのです。

私は、自分が中学生の頃まで子育てというものに無関心で、自分の子供はいなくても良いと思っていました。しかし、今までの祖先があったからこそ今の私があり、また将来産まれてくるかもしれない子の未来を初めから潰すなんてことを考えるなど到底できません。当たり前のことですが、このことより、祖先という存在は自分が産まれてくることにあたつて必要不可欠なものであることを改めて感じました。

子を残していく事の大切さに気付けたのはこのことからだけではありません。それは現在の両親からです。私は両親にとっても愛情を注いでもらっています。今までの寮生活を通して一番感じるの親のありがたみです。学費もそうですが、忙しい中でも電話や荷物を送ってくれ、保護者学級の際は遠い所からも足を運んでくれます。そういったことを私も子供ができた時に

してあげたい。その思いは学年が上がるにつれ、強くなっている気がします。こんなことが言えるようになったのも麗澤瑞浪の寮生活のお陰だと思います。

祖先とは言い換えれば家族の繋がりで。家族というのは「実際の祖母や祖父、母や父と言った祖先から引き継がれる血族集団」といった意味がありますが、もう一つ、「同じ家に住む人々の集団」という意味もあります。私はこれがこの寮生活にあたるのではないかと思います。私にとつての家族は、二つあり、第一の家族が本当の家族。第二の家族が寮生だと思っています。この寮生という存在は本当に家族のようで、私の日常生活を彩ってくれます。特に同学年にはいつも助けられています。相談に乗ってくれたり、くだらない話をしたりと、とても楽しいです。もちろん、意見が噛み合わなかったり、ぶつかったりすることもあります。しかし、そんなところが家族らしいなと思うのです。

また、この寮生、つまり第二の家族にも祖先がいます。それは、この集会室の写真に写っていらっしやる歴代の先輩方です。麗澤瑞浪の寮生活が続いているのも、この歴代の寮生が跡を継い

でこられたからだと思います。この祖先がいるという点を含め第一の家族と第二の家族はとても共通点が多いように思えます。

これらのことより、私が皆さんに言いたいことは、まず自分たちの祖先に感謝し、家系を引き継ぐこと。もう1つは、どちらとの関係も平等にしていくことです。寮生の第二の家族内だけで楽しむのではなく、しっかりと本来の第一の家族に対しても連絡を取ったり、親孝行をしたりしてゆくべきです。逆に残り少ない第二家族との生活も疎かにしてはいけません。

最後に、2つの家族を持つ経験は、寮生活をした人にしかないと思います。今、私たちは、その経験の最中です。その中には、辛い事もあるでしょう。しかし、この高校生活は人生の中のほんの一部に過ぎません。今までの祖先から繋がってきたものを今の私が継ぎ、それを未来の子孫に繋げていく。自分たちが諦めてしまえばそこで止まってしまうのです。なにか辛い事があった時は諦めずに乗り越えていきましょう。きっとそれが未来の役に立つと思います。

頼られ上手

B1寮 6年 相羽 美玖

「頼りにしているよ。」

こんな言葉を誰かにかけられたことはありませんか。もしくは、自分から誰かにかけたことはありませんか。



ますか。頼りにしているとは、相手を「頼る」ということ、つまり自分に助けが必要な時、力を貸して欲しいと思うことです。他人と関わり合いながら生活をしていけば、誰もがこの言葉をかたりかけられたりしているはずです。私は、今年で6年目となる麗澤瑞浪での学校生活で、そのような経験を沢山してきました。6年間を振り返ると、喜び、悲しみ、嬉しさなどの様々な感情と共に、溢れるほどの思い出が蘇ってきます。そして、思い返すうちにあることに気が付きました。それは、中学生の時は頼るということについて特に何も感じておらず、高校生になってから考えさせられるようになったということ。そして、私の場合、誰かに頼るよりも誰かから頼られる事の方が多かったという事です。

中学生の頃の私は、決して積極的な方ではな

く、周りの意見に合わせる事が多い生徒でした。しかし、中学3年生の時に寮長を務めさせて頂くことになり、初めて人をまとめる立場を経験しました。寮をまとめる上での覚悟や責任感は少なからず持っており、周りから頼りにされているという感覚もありました。自分なりに、自覚を持って行動もしていました。しかし、そんな気持ちはまだまだ足りなかったのです。

高校2年生で私は所属していた吹奏楽部の主将を務めさせて頂くことになりました。当時60名程いた部をまとめる主将という役割。決して簡単なことではありません。実際、主将として活動していた時は、辛く大変な事ばかりでした。そこで今までの自分の気持ちの甘さに気が付きました。中でも一番大変だったのは、自分自身のことです。私には、自信というものが足りなかったのです。そのせいで、いつも周りの人に迷惑をかけていました。もっと自信を持たなければいけないとわかっているのに、何かの拍子にその気持ちしがほみ、結局自分のふがいなさに落ち込むような日々を過ごしていました。高校2年生の三学期、私は主将を務めているながら寮役にも選ばれました。やはり、寮役をしても主将

の時と同じ気持ちはずっと心の中になりました。どちらの立場も、周りから頼られる存在。こんな自分では駄目だ、もつとしっかりしなきゃと思うほど楽な方へ行きたがる弱い自分がいました。これらの感情はずっと私の中でもやもやと蠢いており、訳もなく孤独を感じることもありました。

しかし、辛い事ばかりではありませんでした。嬉しかったこと、楽しかったこと、支えてもらったこと。小さなものから大きなものまで沢山溢れています。それらを一つ一つ思いかえしていくうちに、私は多くの人に支えられていたのだという事実が改めて気付かされました。毎日家庭のために仕事をし、私が出演する吹奏楽部の演奏の時は、都合を合わせて聴きにきてくれた家族。最後のコンクールまで一緒にやり抜いた部活の仲間や先生。そして、いつもそばで支えてくれる寮の仲間。こんなにも支えてくれる人がいることはとてつもなく幸せなことです。私にとってこれらの人々はかけがえない存在です。特に、寮の仲間である6年生の皆は、本当に大切な存在です。一緒に過ごすのも気付けば6年目。長いようで短かった6年間を皆と共に過ごせた

事を本当に嬉しく、又誇りに思います。

支えてくれた人々に、私から何ができるのかと考えた時、自分自身を見つめ直そうと思いましたが、主将、寮長という立場から、頼られる事が多かった学校生活。そこで培った力があるはずだから、それを活かしたい。そして、この人なら頼りにできるといふ気持ちを多くの人に持つてもらえる人間になろう。そんな気持ちが芽生えました。家族や仲間のため、社会に出てから周りの人を支えるため、私は「頼られ上手」な人間を目指して行きたいです。

心のカレンダーを通して学んだこと

C5寮 2年 井手迫 馨生



この麗澤瑞浪中学校に入学し、寮生活を始めてから、1年と半年が経ちました。僕たちは毎日夕礼で、「心のカレンダー」を読み、それについて感想を言っています。その中でも僕が一番好きな格言は、「意なく必なく固なく我なし」という格言です。

この格言は、自我を没却した心の状態を表し

ています。「意」とは、自分の主観だけで物事を判断することで、「必」とは、自分の考えを無理に押し通すことです。また、「固」とは、一つの判断に固執することで、「我」とは、自分の立場や都合だけを考えることです。この格言を要約すると、自分勝手な行動が全くなく、広い視野に立って客観的に物事を判断し、他人の意見をしつかりと聞いて、全てのことに応じた心を持って接し、どのような場合も相手の立場を思いやって行動するという意味です。

寮生活は、自分だけのことを考えていたら他の人に迷惑ばかりかけてしまうと思います。また、この学校でしつかり勉強ができていたのも、楽しく寮生活ができていたのも、全て親など家族、先生方、友達、先輩方のおかげだと思います。そのような人たちに感謝をせず、当たり前のようにしているのも、自分勝手と言えらると思います。

色々なことで成功し、有名になった人たちはみんな、必ず大きな苦勞がありました。以前、栗本先生が夕礼でおっしゃっていたのですが、上杉鷹山という人は、当時財政危機にあった米沢藩の藩主となり、とても苦勞をしました。また、

徳川家康は、幼い頃、人質となっていました。さ

らに、この麗澤瑞浪中学校の創設者の、廣池千九郎先生は無理をして勉強をしすぎたため、当時の医療では治らないとされていた病気にかかってしまいました。しかし、その人たちは、それをプラスで受け止め、努力しました。

特に千九郎先生は、その病気にかかってからこれからは世のため人のために命を使わせていただくと言ひし、努力を続けました。

まだ寮生活は中学校生活だけでもあと1年半、高校に入れば4年半ほどあります。この寮でたくさんのことを学び、経験して、中学・高校と寮生活をしてよかつたと思えるように、これからを過ごしていきたいと思ひます。そして、千九郎先生のように、大人になったら世のため人のために命を使えるような人になり、社会に貢献できるような人になりたいと思ひます。

寮生活で学んだこと

B10寮 1年 河村 真優

四月にこの寮に入寮してきて、はや7カ月が経ちました。私は今回、このような役をいただき、改めて、この7カ月間を振り返りました。

私が寮生活をしてきて一番学んだことは、「家族がそばに居ることのありがたさ」だと感じました。最近、三つのありがたさを感じるようになりました。

一つ目は、家族と毎日たわいもない会話ができることのありがたさです。私は、小学校5・6年生のころ、家族に対して、とても反抗的でした。毎日、なぜだかイライラして居て、そのころは、家族のありがたさなんか、考えたこともありませんでした。なので、この学校に入ることが決まった時も、寮生活が楽しみでしかたがありませんでした。しかし、いざ、寮生活が始まってみると、洗濯なども全て自分でしなければいけないし、先輩に気をつかわなければいけないし、大変なことばかりで、日に日に家族のありがたさを実感しました。夏休みは、休みの半分程が部活



の合宿だったので、短い帰省期間を思う存分楽しみました。しかし、楽しすぎたせいか、帰寮するのがとても嫌で、とても寂しくつらかったです。帰寮してからも、その気持ちは変わりませんでした。私は、毎日毎日、親に電話をかけました。今日のこと、友達のことなど、そんなにたいた内容ではなかったけれど、私は親の声を聞くだけで、とても安心しました。

二つ目は、妹のありがたさです。夏休みが終わり帰寮して2日程経ったある日、電話で母が、今日仕事から帰ってきたら、妹が私がいなくて寂しいと泣いていた、と言っていました。私はその話を聞いて、いつもケンカばかりする妹が、そんなことを思ってくれていたのだと思うと、涙が出るほどうれしかったです。その後、一通の手紙が届きました。それは、妹からでした。そこには、「毎週手紙送ることにしたよ」と書いてありました。私は、こんな姉思いの妹は、私の妹以外他にいないのではないかと思いました。

三つ目は、母のありがたさです。私は、今月の10月7日に、13歳の誕生日を迎えました。私は、その日の、私が生まれた13時45分に、母に電話をかけました。そして、「私を産んでくれ

てありがとう」という感謝の気持ちを伝えました。母は、涙を流すほど喜んでくれて、とてもうれしかったです。

他にも、毎週欠かさず手紙を送ってくれる祖父母、仕事を頑張って家族を支えてくれる祖父、同じ学校でも心強い兄。私は、この家族であって本当に良かったと思います。

私は、この寮に入って、家族に「ありがとう」と心の底から思えるようになりました。これからは、家族にたくさんのお返しをしていきたいです。そして、名前の通り、真の優しさを持つ素敵な女性へと少しでも近づいていけるよう、頑張っていきたいです。

人権作文

岐阜県人権作文コンクール 奨励賞

自分の柵

2年2組 色摩 澄音



近頃、テレビでは、車内に子どもを置いたままパチンコなどに夢中になって、子どもが亡くなっていることにも気がつかない人や、障害者施設で職員による大量殺傷事件が起きるといった恐ろしいニュースが流れることが以前より多くなっているように感じます。いじめなども長きにわたって問題視されていますが、未だに自死にまでいたるような事件はなくなりません。このようなニュースを見るたびに、なにか日本の社会には、簡単には取り去ることのできない問題が根を張っているような気がして暗い気持ちになります。そう遠くはない将来、私の両親も老人ホームなどの施設にお世話にならないといけないかもしれません。そんな時、施設の人が信頼できなかつたり、経済的に苦しく、自分一人で介護をせざるをえなくなつたりしたら、私は果たして健全な心で対応できるの

か、正直自信がありません。

現在社会では、たとえ道端に急病で倒れている人がいても、どの人もどの人も足を止めることなくいそいそと行ってしまいうようなイメージを感じることはありません。このような状況が生まれることを、リンゲルマン効果というそうです。リンゲルマン効果とは、社会的な手抜きとも言い、人間の、集団になればなるほど無意識のうちにはたらいってしまう、他の人がなんとかしてくれるだろうという手抜きの心理が引き起こすものだそうです。自分もその集団の一人になりつつあるかもしれないと思うと、いつか自分が助けを求める立場になったとしても、声を上げる資格なんて無いように思えて苦しくなります。でも、そんな感じをあまり受けない場所もあることを私は知っています。それは、「微笑みの国」と呼ばれるタイです。私はタイで小学5年生の1年間を過ごしました。タイの人々は、子どもや社会的弱者に対して心優しい人柄です。お寺や歩道橋などの人通りの多い場所に物乞いにやってくる障害を持った人に、施しをする通行人もよく見かけましたし、信仰が厚い人が多く、街のいたる所にある、サーンプラプームと呼ばれる

る祠はいつも手入れされ、花などがかざられています。飲みものやお菓子などのお供え物は絶やされません。お寺の前を通れば足を止め、必ず祈りを捧げていき、困っている人がいれば自然と手をさしのべます。タイの日本人学校でも恵まれない人のための活動を積極的に行っていました。生徒の父母や学校の関係者からは、施設で暮らすタイの子ども達への募金や募品が沢山集まりました。私はボランティア委員会の活動でバーンファンファという、障害がある子どもや、親の無い子どもが暮らす施設に行くことになりました。施設に着くまでは、言葉も通じない子ども達と遊べるのか不安でしたが、ドラえものの歌を日本語とタイ語で歌ってあげたり、ブロックなどのおもちやで遊んだりしていると、普通に楽しくて、お互いの違いの事など特別気にもならなくなっていました。現地の子ども達とふれ合えたことは、私にとって貴重な大切な経験になりました。

タイでは、どの人も皆、敬愛されている王様の下で一つの家族のように暮らしている感じですが、食事をする時も、家族とだけでなく、外の屋台で色々な人と食事を共にします。私も夕方になる

と、友達とロティ(クレープのようなもの)を食べに行きたくて、アパートの前にロティの屋台が来るのを心待ちにしていたものです。体が不自由な人でも外に出れば助けてくれる人にも会えるし、沢山お金を持っていなくても外に出れば安くておいしい食べ物を誰かと話をしながら食べられるのです。そんな環境が人には必要なのだと思います。残念ながら日本では、貧困に苦しむ人が誰に相談することもなく家の中で餓死していたり、いじめに悩む子どもが家族に相談することもできずに命を絶つたりするような悲劇的なケースが実際にあります。もしも困った時外に出て、誰かに相談することができていたら、身近にそんな環境があったなら、救われた人もいたに違いありません。

私たちはつい、自分の物差しで色々な柵を作りがちです。今一度、自分の柵がどうなっているか考える必要があるかもしれません。もっと色々な人が訪ねて来られるように、もっと沢山の人が中に入れるように。まずは、自分の高くてすき間の少ない柵を作り直して自分から外が見えるようにならなければと思いました。そこにはきつと、風通しよく気持ちのいい自分がいて、

そんな自分こそが、他の人々に優しくなれるに
違いないと信じているのです。

オーストラリア修学旅行

自分の気持ちを言葉で伝える

3年2組 日比野 のどか

「いつもみたいに表情
だけで気持ちを伝えよう
と思ったらダメだから
ね。」私はこの意味がよく
分かりませんでした。



私は初対面の人や目上の人に自分の意見を伝
えることが得意ではありません。大体、相手の意
見に賛成し、どうしても意見があるときは首を
かしげてみたり、眉間にしわをよせてみたり、苦
笑いしてみたり、表情を変えて察してもらって
いました。今回の研修旅行でもいつものように
コミュニケーションを取っていれば大丈夫だと
思っていました。

初日の授業でワークシートが配られました。

私はそこに書いてある英文を一つ一つ解読しつ

つ、取り組んでいました。すると、私のバディ(付
添生徒)が「これは難しいからもういいよね。」
と言ってきました。私はやつと英文が分かって
きたのでやりたかったのですが、そこで「やりた
い。」とすることができず、いつもみたいに苦笑
いしてみました。すると私のバディは、「じゃあ
捨てておくれ。」と言ってワークシートをゴミ箱
に捨てました。彼女は親切心だったのかもしれ
ませんが、私は悲しくなりました。それと同時に、
表情で察してもらえないとコミュニケーション
がどれほど難しいのを知りました。

ある日、私はホストマザーと買い物へ出かけ
ました。買い物が遅い私にホストマザーが「早く
帰りたいから早くして。」と言いました。私は驚
きました。もし、私がホストマザーだったら絶対
に言えないと思ったからです。私のホストマザ
ーはハッキリした人でした。私が夜更かしをし
た時はとても怒っていました。でもお手伝いを
した時はとても笑顔で「Thank you」と言ってく
れました。私のバディも友達にからかわれた時、
キツイ口調で怒っていましたが、謝ったらすぐ
に許して仲良くなりました。私はこの時、最
初の言葉の意味が分かりました。

今回の研修旅行で私が関わった人はみんな素
直でした。最初にバディが表情を見て察してく
れなかったのも、きつと普段の生活で察する必
要がないからなのでしょう。嫌なことは「嫌」と
言う。嬉しい時はちゃんと笑って感謝を伝える。
つまり自分の気持ちを言葉で伝える。これが英
語力よりも大切なことだったのです。

だとしたら私はものすごく失礼な態度をとっ
ていました。確かに私は嫌なことは「嫌」と言い
ませんでした。いつものように苦笑いをしてい
ました。嬉しいことをしてもらっても、「ありが
とう。」がきちんと言えないことが何回もありま
した。私は2年間勉強してきた英語を使ってい
ちんと意見を伝えることができなかったのです。
私たちは、生まれてからずっと言葉を学んで
います。2年前、それに英語が加わりました。で
すが、私たちはその言葉をどれほど適切に使え
ているのでしょうか。意見を言葉で伝える、私に
とっては難しいことですが、これからはなるべ
く、自分の意見をきちんと言葉にしようと思ひ
ます。さらに、感謝の気持ち、嬉しい気持ち、楽
しい気持ちも伝えられるようにしたいです。そ
して、また海外へ行く際には、今よりもたくさん

の語り力をつけて現地の人と楽しく会話をしたいです。

瑞浪市主張大会

日本が誇る文化

3年3組 齋木 祐舞

日本人は、世界の国々から礼儀正しい、そして親切だと賞賛されています。例えば、挨拶をする時のお辞儀、お店の接客時の店員の笑顔を絶やさないやさしい対応、物を両手で差し出すことなどが挙げられます。こうした普段の生活の中の何気ない行動が、外国人にとって驚くべき姿であると、本やテレビで取り上げられているのを目にしました。

そのような日本人のすばらしい行動として報道された中で、強く印象に残っている出来事が二つあります。

一つ目は、二〇一四年、サッカーワールドカップの試合の後、会場に落ちているゴミを拾って袋詰めしていた日本人サポーターのことです。

私たちも、研修として集団で行動した時、利用さ

せていただいた宿泊先や、イベント会場をきれいにしてその場を後にするようにしています。

サポーターの方たちも、「使わせていただいた所をきれいにする」「来た時よりも美しく」という心からの行動だったと思います。私は、海外のサッカーの試合会場でこの行動をとった人たちを、同じ日本人としてとても誇らしく感じました。

二つ目は、東日本大震災の時のことです。災害の被災地では、順番を待って支援を受ける多くの人の姿がありました。ストレスの多い状況でも秩序を守り、「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉にしながら、支援物資を受け取っていました。それは、自分を抑え、共に譲り合いながらの生活だと思えます。この姿を海外のメディアが日本人の美德として取り上げました。

実際、私たちは、地震などの自然災害の多い国に住むものとして、「どんな時でも協力し、助け合う」ことは生き抜いていくために必要なことであり、当たり前のこととして教えられてきました。私たちが当たり前だと思っていることを、すばらしいと賞賛されたことに私はとても驚きました。

それでは、この、日本人の誇るべき姿はどんな

ところから来ているのでしょうか。

江戸時代ごろからの村社会では、村のルールや秩序を破ると「村八分」という制裁が課されました。それは、水や食料を十分に手に入れることができなくなり、生活していくのが困難になることを意味していました。当時の重いルール違反は、里山の自然を破壊したり、食料を独り占め



にしたりする行為です。環境が破壊されれば、村人全員の死に繋がります。みんなが生きていくために、自分勝手なことは許されず、ルールを守ることで村人の生活が守られていたのです。ルールはみんなが生きていくために守らなければならぬものだったのです。

また、江戸は、世界でも最大級の大都市でしたが、密集して暮らす中で他人に思いやりをもつて生活する工夫をしていました。それが「江戸しぐさ」です。雨天時に狭い場所ですれ違う際、お互いの傘を傾ける「傘かしげ」、人混みで足を踏んでしまった人も踏まれた人も謝る「うかつあやまり」などが江戸しぐさの一例です。

このような歴史が、今の日本の、「ルールを守ることでともに生き抜いていく」「マナーを守ることで生活しやすい環境をつくっていく」そんな姿を培ってきたのだと思います。そして、先人たちが実践してきた礼儀や粋な行いが、今、私たちの誇るべき文化として存在しています。それが、あのサッカーのサポーターや被災地での姿にほかならないのです。そして、その姿の根底には、「相手を思う気持ち」があることも忘れてはいけません。

私たちは、この文化を受け継ぎ、伝えていかなければならないと思います。現代に生きる私たちも、江戸しぐさのような何気ない他人へのやさしさを忘れずに生活していくことで、よりよい社会や人間関係を築くことができると思いますが、そして、この文化を大切にしていけば、私たちは、これからのさまざまな困難を乗り越え、「ともに生きていく」ことができるだろうと信じています。

瑞浪市主張大会

どこかで咲く笑顔のために

5年5組 伊藤 優花

「髪を切りたい。」そう思ったのは「ヘアドネーション」という言葉に出会ったことがきっかけでした。

ヘアドネーションとは、NPO法人のジャパン・ヘアドネーション・アンドチャリティー、通称ジャーダックが行っている、特定非営利活動です。百パーセント寄付された髪の毛で作った、フルオーダーメイドの医療用ウィッグを、生まれつき髪がなかったり、小児がんで髪を無くし

悩んでいる十八歳以下の子供達に無償でプレゼントしています。

美容師である私の母からジャーダックの存在を聞き、この言葉を知った私は、その日に髪を切って寄付しました。もちろん躊躇いもありました。それは、長い時間をかけて自分なりに綺麗に伸ばしてきた髪だったからです。しかしその分、自分の髪がウィッグになって頭髮の悩みを持つ同世代の子や、さらに幼い子供達の髪となり、喜びに満ち溢れた笑顔へ繋がると思うと、想像しただけで嬉しくなりました。そして、これからも綺麗に髪を伸ばし、規定の長さ以上になる度に寄付すると決めたのです。

ウィッグを作るためには最低31センチ以上の長さの髪が必要で、50センチ以上の髪が特に求められているそうです。寄付された髪の中には短いものも多くあり、それらは転売することで製作費にあてられるなど、間接的に利用されています。そして、一つのウィッグを作るためには約三十人分の毛束が必要です。頭髮の悩みを持つ子供達のために寄付しようという、多くの人の優しい思いが一つのウィッグとなり、その子供達に届くのです。

想像してみてください。自分が病気で髪をなくし、辛い毎日を送っている時、多くの人々の協力によって作られたウィッグが、自分の元に届きます。今まで出来なかったヘアアレンジが可能になり、自分に自信が持てるようになるのです。嬉しいと思いませんか。私はその立場であれば、涙が出るほど嬉しいです。実際に、私が見たテレビの情報番組では、初めてウィッグをつけたある少年が大はしゃぎで家族と一緒に買い物と食事に行きました。また、ある幼い女の子は初めてカチューシャをつけ、満面の笑みで鏡の中の自分をずっと見つめていました。どの子供達も溢れんばかりの素敵な笑顔でした。

今日、私がこの場に立った一番の目的は、私の主張を一発信元として、今はまだ浸透していない「ヘアドネーション」という活動を多くの人に知って頂くことです。さらに、私のこの主張を通してヘアドネーションという言葉を知った一人ひとり、それぞれ新たな発信元となり、遍く浸透していくうえでのサポーターとなってください。このことを心から願っています。

ジャーダックには、ウィッグ希望の声が多く寄せられています。まだまだ髪や人手が足り

ず、二〇一七年五月時点で百三十名以上の子供達がウィッグ提供を待ち望んでいます。私はそんな子供達に髪がある喜びを感じてもらいたいのです。

ヘアドネーションという活動は、自分の寄付した髪がどのように使われるのかが明確です。だからこそ寄付した側の達成感や喜びが大きく、幸せを共有していることも深く実感できるのではないでしょうか。

私は将来医療に携わる仕事に就きたいと思っています。病気の人が笑顔になり、一つひとつ自信を増やしていくことに貢献できることを自身の喜びとしたいのです。そのために、今は一生懸命勉強するとともに、髪を伸ばし、寄付していきます。そして自分の切った髪を寄付することで病気の人の心に寄り添い、笑顔の花を咲かせたい。

これからもさらに多くの場所で笑顔の花が開くことを願っています。みなさんも私と一緒に、小さくて大きな一歩を踏み出してみませんか。



